

滋井藏

種類番號

1884

明治花街

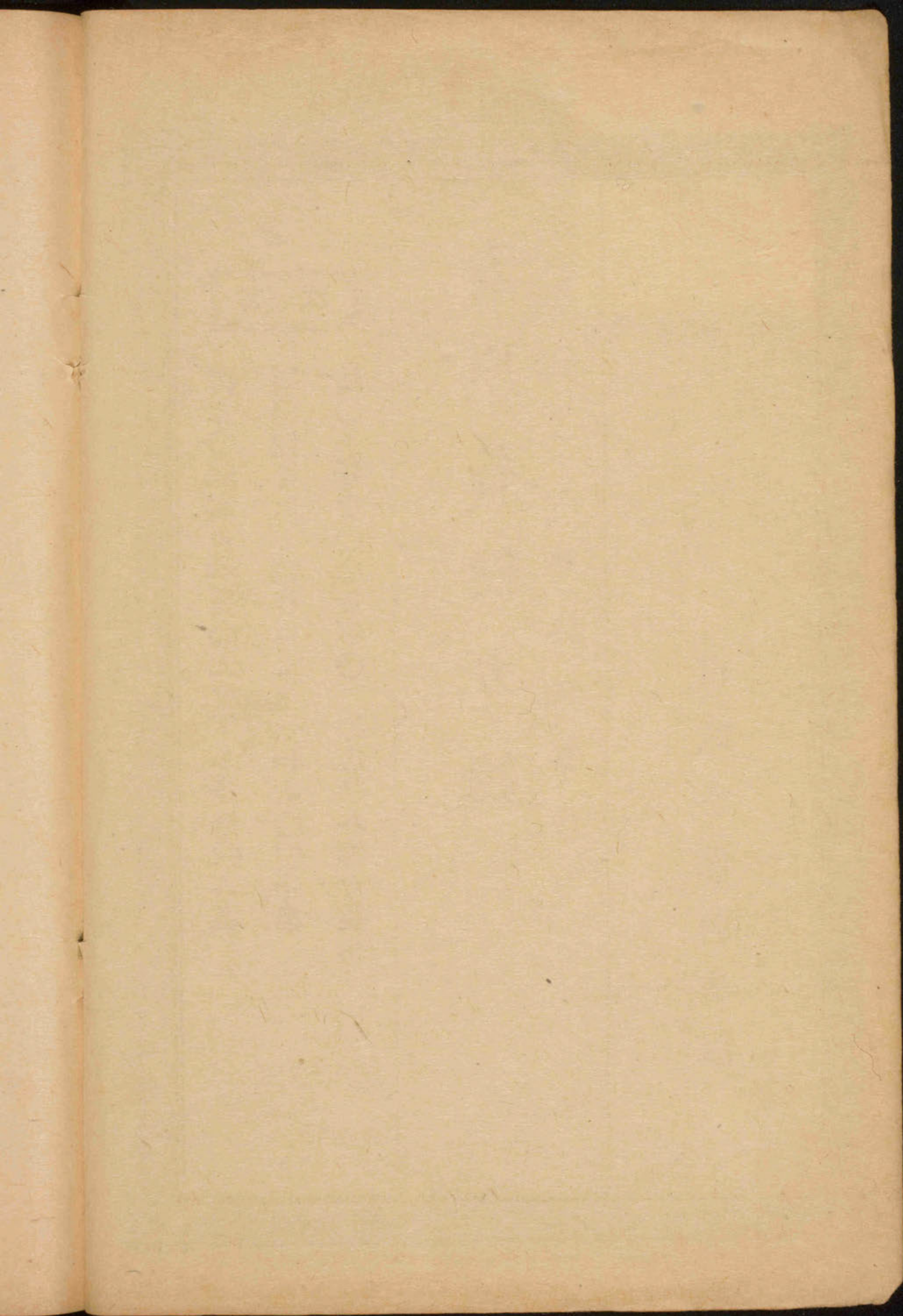
芳原各樓力競

一名登樓獨業內

出戲劣罷翁藏版

次目

緒言○遊客の心得○上中下三等愉快乃區
別○惚きたと惚れぬと見る秘術○引手茶
屋○上等店○中等店○下等店○各樓力競



芳原各樓力競よしはらかくろうちからくらべ一名な登樓獨案内とうろうひどりあんない

出で戲け劣れつ罷ば翁をう述のべる

緒ちよ言げん

花はなの艶るんありと雖いへども語かたむ。月つきの妍けんありと雖いへども情じやう無し。言いて語かたく情じやうあつて。而しか

も往いく日ひも来きたる日ひも。變かこる習あらひの世よれ中なかに。何い日つもかあらしぬ北きたの方かた。吉よし

原町わらまちの解語花ものいふはな。花はなれ唇くちびるの月つき。お酒まめが好さけきあらしお酌しやく。一いよう。ぶ。一いつけを

がらお心こころ意氣いき。タツタ一ひと口くち聞きき度たひもれと。まゝめる儘まま乃なトンチンカン。

嗟さ峨がやお室むろれ花はなざうり。浮氣うきか蝶てうも色いろかせや。廓くわくれも乃なに連つれりきて。袴はかま

も春の朧はる おぼろ漆めぞ朧おぼろげおらぬ殿どのぶりと見みをめぐりめて。と唄うたふ杖き閑さそり

や私わたししかういふ文句もんく意氣いきを殿子どのこと見み染そめとい。實じつは無理むりでい御坐ござんせん。

寧いっをあたに罪つみですよ。どふせ爰こゝでえ勝かたれあひ。お酒さけの止とゑゝお茶ちや――

そ。そしてそれからお床とこいり。お床とこにお部屋へやは舒のびてある。どれく私わたししが

お先^さきよと手^てとり足^{あし}とり夫々^{それぞれ}れ。部^へ屋^やへ連^つれ込^こみびツしやりと左^{ひだり}りで

以^{しめ}て右^{みぎ}の手^てで。アレサあな^{どうじやう}たも強^{たをへ}情^へを。假令^{たをへ}どれ^{たをへ}ゝど^{たをへ}おい^{たをへ}や^{たをへ}でも。ろ^{たをへ}う^{たをへ}し^{たをへ}

さものでいありません。「杯あそとお前まへの人ひとをかり。「うんおと私わたしもこれよ

ふに。「心こゝろも共ともは解とけとかへ「疑うたがひあんをを何處どこまでもと。口くち説せついふたりに

己れさり。^{ほか}外より見るさへ面白ひ。その面白ひ芳原ふ軒を並べと家々々々。

ちから
力くらべをかきつゝる。前まへは一ひト筆ふでつゝちよつと廊くるわの風習ふうしゅう上中下じやうちゆうげ。三
つは分わかつて夫々それぞれの遊びあそび塩梅あんばい愉快えんくわいの區別わかつち。もてたともてぬを見るみ秘術ひじゆつかい書
て知しらしてこれでいと通かよふ多おほくの客きやくの中なか。時々ときとき庫くられ屋根やねがもり。堅氣かたき老
爺ぢやの傾城けいせいは。ふられて歸かへる果報くわほうもの。杯あそと息子むそこは教訓けうくんも。思おもふと程ほどは當あ
て込こまむ。粹そいで堅かためと洒落言しやれごとの勸善懲惡かんぜんちやうあくろこころへ。雜まがへとやうで行ゆく
道みちと。案内あんないをるとい尻口しりぐちれ。間違まちがふところいどうあろう遊あそぶ客達きやくたち心こころあう。
漢武楚襄かんぶそせうと學まなぶことあうれ

總そう論ろん

廊くるわの大門だいもんを踏ふみ込こむ上うへに。誰たれも一夜いちやの娛たのしみと極きわめんと思おもふものより。

又またあるたけ金かねのいらぬやふ遊び度あそびきものなり。あゝし矢鱈やたらに金かねとおーん
で。後朝きぬの別わかれ。喧嘩けん半分はんぶんで歸かへるやうおも。馬鹿ばかうーきもれなれば。凡をよそ
物もの乃な定きまり丈だけ。遣つかふ心持こころもちよくあるべし。又また如何程金いかほどかねと水みづのやふ遣つかふて
も。氣障きざで堅かためと遣つかひやふあれば。寧いづろ遣つかひぬ方ほうこそよけれ。その活金かきがねと
死金しにがねと遣つかふの。唯ただ自分じぶんの取とりなしひとつあれば。よくく遊あそ客きやくの心こころと
用もちひて散財さんざいをべし。此等これられ事ことこの冊子そうしは書かつぐりた々れども、なうく
その呼吸こきゅう。口くちや筆ふでよて。云い盡つくされぬことよて。通かよふ内うちは自然しぜんとわか
るものあり。唯ただ初會裏はつしやかいうら二會目にかいめと裡名りな染ぞめといふ上中二等じやうちゆうにとうの店みせよて。祝儀しゆぎ
れらのあ。杯あそよく。歌うたを一つ歌うたふよも。話はな一つするよも。氣障きざかこと
とあし。

と云いぬ。至つて面は柔かゝ見せて。心と剛くもち。面は剛く見せても心

の柔かなるといふせ。我身の分限と考へて。身の粧り其外一寸の話し迄。

無理は粹人めかさむ。持性を丸ではね出さく。處々は野暮ともあらぬ語

遣ひと取りあしこそ。誠は遊客れ大事のとあり。すべて初めて遊ぶ人。

藝妓幫間と呼ぶこと大禁物なり。それとも坐敷がさびしくて。あつさり

ささぎたければ。藝妓ばかりと呼んで。早く歸をべし。必ず幫間だけの招

くべからむ。廊下で爪弾きとせらるゝの基にて。ろの取り扱ひに。至つて

六ヶ敷ものにて。唯娼妓や新造は。我があらと見らるゝむかりあり。あら

し此に真の初めのことよろ。廓の風習は。能く通ぐさらん人。あま

おんでも藝妓と幫間やどの招くもの多し。又廓れ青樓は上中下の三種ありて。上中の青樓は遊ばんと思ふもの。引手茶屋より遊び下れ小店は遊ぶもれ。振り方言引手茶屋より往て登るものなり。うれ引手茶屋の成立。上中下三等の區ち等。此の次は説けば。それくはついで知り給へ

上中下三等愉快の區別附惚れたと惚れぬを見る秘術

遊の愉快は。上中下三等ともは區ちのあるも乃なり。上等の愉快は。初回にてはあきもれ。して三返四返と通ふ程面白くあるものあり。そのかわり初回は。當前は愉快にあるも乃。て假令娼妓の心にて。好

さうしい殿子だと思ふても。左程厚く待遇もせむ。又少々い氣障な人だ
と思ふても。別は三日月さまれ真似もせむ。同ぐやふよとりもつもれお
り。中等店い。上は陳べさる上等店と。十は七つい同ぐことあり。あうし中
等い中等だけ。品位のさがることあれば。下等い近き處もあり。看客よろ
しく上下れ中ときに當らむと雖も甚あき間違も何らむ。下等店い
上中と余程異なる處ありて。好さお方と思はれさう。余處の勤めいあんれ
その。お部屋。方言樓主をさし。でどれやど叱かられても。郎君ゆへなら苦
しやあらぬ。お忌であるふが今夜だけ。お側でねかしおくんあさい。初會
の晩からこのやふよ。いふても勤めれ果敢あさふ。定めて無根だとかつ

仰るぬ。疾あやから知して居ゐるけれど。不ふきたが因果いんぐわ不ふきたられて。主ぬしもあさけけ
 知るしあれば。何い日っでもよいからお首しゅ尾び乃なよい時ときよい。此こ度どさあんしよと。
 えや涙あみだぐむ可愛かわいさい。看みる客きやく宜い敷し推おしし給たまへ。それふ引ひさかへ振ふらきてい枕まくら
 よふ聞きけ煙たばこ草ぼん盆ひと獨ひとり寐ねるあう宅うちでねる。三み日かづ月ぎさんでも昔むかしうら宵よひよ
 ちろりと顔かほだけい見みせあいこといあいもれを。寝ねせとまるとい何なんま
 りな命いのちふ別べつ條てうがあいぱうり。エーどれつてへ。尼あまめだと愚ぐ癡ちと溢とほまを不ふ
 愉快ゆかいの極きよくりありとああり給たまへ。おんを愉快ゆかいと不ふ愉快ゆかいとい。上じやう中ちゆうれ二ふたつよ
 い無なくし。下か等とう店てんよい間ま々あるあうひあり。扱さて次つぎふ惚ほれとと。惚ほれぬ
 と見みる秘ひ術じゆつい。予よ數たひ度くの實じつ地ち經けい驗けんより。見み出いだしとるものよ。委くわ敷し論ろんを

れば余り長々敷なれば。一寸つかんで一筆爰とめおらん。下等の娼妓
に直ふ娼妓について知り。上中の二つに。もとより娼妓について知るな
れども甚どその如何と見出し苦さもれよて。おれを見るよに新造の取
りおしよて見れば。能く分るものなり

引手茶屋

引手茶屋に。遊客と青樓を送り。遊客は不都合おきやふふ。夫々へ娼妓
を配り合はるに申を及ぬ。酒肴其外萬事萬端世話をふし。客の褥
ふ就くまで。一連の客は一名に下婢を附けおき又客の明朝歸るとき
に。迎ひの爲め青樓は来り。とどへ客は熟睡して居ても。これと起あそ一

應茶屋へ連れ歸り。勘定等と濟まゝ歸すものあり。それ待遇をうけ。

至つて親切なまて。散財等の如きも客より好まざれば。決まゝ無益の散

財をさせむ。この引手茶屋より上下れ差別ありて。七軒茶屋大門を入り

軒をすべて仲之町乃茶屋を上等とし。江戸町揚屋町其外大門外土手東

屋の茶乃茶屋を下等とす。昔より下等の茶屋より往々田舎漢なぐより

不當れ勘定と。とるやふあることありよし。これら茶屋をなれども

今時の上下とも左様なこといせむ。いづれもおなじことあり。さりながら

上下の別あり。依然としてあるものあれば。下等茶屋より送られて

行けば。自然と客れ。品位の下る處ろもあれば。成るべく客れ上等乃茶屋

より遊あそぶべし。あらし七軒茶屋しちけんぢや。まべて仲なかの町ちやうれ茶屋ぢや。初し會よくわいの客きやくとあ
げることと謝絶ことわるする家多いへおほし。尤も茶屋もつても客ぢやと青樓きやくに送りて。營業せいりやうとあ
まことあれば。身みれ粧かり等都合どうつがうよくあう行ゆけ。強あまがち忌いむ譯わけもあし。又上
等さうの茶屋ぢやより遊あそぶも。下等かさうれ茶屋ぢやより遊あそぶも。勘定等かんじやうどうに更さらまかふること
あし。されば遊客やうきやくに上等茶屋じやうどうより遊あそぶこそ。全まつたくの利徳りどくあり。されども
これに真しんに初はじめて。大門だいもんと踏ふみ込む人ひとふ。お告つげもうま迄までれことよて。廓さど
乃事情ことも。よく通つうたらん人ひとに。却かへつて下等かさう乃引手茶屋ひきてぢやより遊あそぶも。面おも白しろ
さあがいふも乃もあり

じやうどう せん
上等店

上等店じやうとうてんの角海老かどゑ京町きやうちやう品川しんがわ揚屋町たいてい大文字おほもじ江戸町いゑまち稻本いなもと角町かどまち尾彦町おひこ江戸いゑ

あの五樓ごろうまで何れいづも玉代ぎやくの壹圓いちえんあり。樓ろうの結構けつこうに。至いたつて宏壯こうそうなるもの

よろ。店附みせつきはあしむ。方言ひやうげん娼妓ちやうき乃店頭のてんは列れつを。外表をよりこれを見みれば。恰あたも

官衙くわんしやれ如ごとく。夜よも更ふけ人ひと乃往來なうらいも。たへるとさよ。絃鼓せんこ乃聲こゑえるか。

耳みみふ達たつを。然されども樓中ろうちゆうは入いれば。其雜沓そのこんざつをること。實じつふえふただしく。歌うた

ふもあれば。舞まふもあり。歸かへうんとあゝ。猶なほ別わかれと惜おしむが如ごとき何なり。別わかれ

を惜をしんで流連いつまけは決けつまるものあり。數百そうひやくれ客きやく。數十さうじゅうれ妓ぎ。右往うわう左往さわう。楷子はいし校せま

さよあらねど。肩かたを摩そり。廊下ろうか甚はなだ廣ひろと。いへども。腕うでを撃うち。その盛大さかん

ある。登のぼつて後のちふ知しり給たまへ。さてこ乃上等店じやうとうてんふ遊あそばんと思おもふも乃ひきて引手ひきて

茶屋より遊ぶものにて。振りよろゆくべうらむ。まうー一二振り乃客

よろも遊ぶする家もあれども。散財費も更なる變りの無くして。自然と体

裁等もよろしからむ。予一度某乃樓は振りよろゆくきたるとき。遊ぶ前

玉代酒肴料を拂ひしたり。尤もあつたの處に。經驗れまくなきことなれ

ば。悉く左様でまかどふだか。確とい知らむ。何分共初めて行く人どもに。

かあらむ引手茶屋より行くべし。樓ふも自然と振り乃人と忌むも乃あり。

まべし此等れ樓に一人ふて遊ぶむ。玉代ともふ二圓。二人あまば三圓二

十錢。三人あれば四圓七十錢位ひと。通常とま。尤もこれに初會のおどふ

る。裡ふあまば。裡名漆祝儀あがいて。少々増すものなり。

中等店

ちうさうてん 中等店。梶田住吉龍ヶ崎江戸町寶来伊勢揚屋町の五樓より玉代に七

十五錢を定則とせれども。間々こまより減りたるもれもあるよし。樓に

結構に上等店に同じくあて。店附より何れを。されども或は店頭より玉代

と酒肴費と合ふ。幾何乃金よて遊ばるゝといふことを記し。或は牛方

客を引く男と出あゝ客を引き。登樓さるる等のことあり。さてこの中等

店に遊ばんと思ふもの。引手茶屋より遊び。又ハ振りより登るもの

あり。一うち初めて遊ぶ人杯。かならず引手茶屋より遊ぶべし。振りよ

てあがりて。何れ上等店より品位のさがることあれば。野鄙乃風をさ

は何らむ。たどへみせさき假令店頭は壹圓いちえんにて何もかもあに皆な濟む様をよかいてありても。

酒後茶菓子等と取りしめ。しめごちやくわしとう又ハ酢飯またと取りしむる等をのことあり。この茶

菓子或ハ酢飯等ハ至いたつて高直たかきなるものなり。大概一枚たいがい一枚五十錢を以て

定きまりとす。酒肴等ハ一枚二十五錢のものにて菓子くわしの如きものハ二枚にまいを

一臺いちだいとぞと出だすものなり。ゆへふその酒後しめご乃菓子くわし。又ハ酢飯またより。大變散たいへんさん

財費ざいひ乃嵩かさむこと何り。うれも客きやくより謝絶ことわりをせば。無理むりふ押し附おけるおと

もあつれども。いさつてさまりの惡あしきものふて。甚はなだ謝絶ことわりをがとし。これ

も靡くるわの事情じやうふも能よく通つうじたる人ひとハ。そこら試都合つごうよく取計とりはかりふおれども。

初はじめよりその取とり扱あづかひハ。面倒めんどうなれば。かゝらむ引手茶屋ひきてぢやより遊あそぶべし。

ひきでぢや、引手茶屋より行けバ。決まゝ簡様あることいあきものあり。まべてこれ
ろの樓ハ。一人よゝ壹圓五十錢。二人よて二圓四十錢。三人よて三圓三十
錢位のも乃あり。尤もこれハ初會のおとよて。裡ふあれば裡名様の祝儀
おぞいりて。少々増をも乃あり

下等店

下等店ハ。河内。中米。安尾張。角尾張。各京町二丁。稻辨。京町一丁。其外一々爰
に舉げざれども。悉皆よてハ殆んど。七十軒有どあり。玉代ハ一定せむ
。五十錢。四十錢。三十五錢。三十錢。二十五錢と。五つの差別あり。樓乃結
搦ハ。随分宏壯あるものもあきども。皆ハ店附きにまゝ。娼妓店頭ハ列

店頭ふ列をるときお職なるものの上より三番目よ坐を煙管と持川も

あり。玉章と讀むもあり。客より来りさる玉章を娼妓よ店頭ふ列し

其美あるに一笑閉月一媚羞花乃容あり其醜あるに黎面低鼻臂大如白

の者あり。然れども此れまた。夜目遠目傘乃内一寸見てに更よ美と醜と

の區別と見む。何れも小野の小町も跣足で、逃げるやふよ見ゆるあり。ゆ

へふ田舎漢あがり。一度これと見れば。未ど棲よの登らざれども。早や魂

に有頂天外よ飛揚し。誕れ流れて三斗と三升。鼻毛のびて三丈三尺。

家藏家財と棒よふるとも。花魁見と様を女房を持つて。此の世ふ生れと

甲斐もある。老爺いどれやど叱かるとも。僕關せぬ馬杯と惡く洒落たる

じやれ歌も。少ゑい心よその意氣を含みて。出ることおれば。必ぢ意の猿
 と馬。矢鱈は絆とゆるし給ふ。閑話休題却説下等店は遊ばんと思ふも
 此。固より振りのことおれば。格子外より娼妓を熟視し。己れの意は適
 し。さるときは。豫め牛と勘定と定め。決まると乃高より登らざるやふ堅
 く約束をべし。牛は又必ぢ客より。散財費と問ふは先だち。格子外は立て
 ぱ。誰れ彼れ乃差別なく。袖と引て。切は登樓を勧む。其の言は曰く。旦那
 入らつゝあやい。お手輕さまで。如何さま。脇方と違ひまゝ。決まると御無理
 乃御散財の望みません。今日の誠におひまで。皆を坐敷もあいて居りま
 せ。旦那如何さまと巧は説て。遂は客と一と登らまむ。此言固より虚はあ

らむと雖も。酒後茶菓子。或は酢飯を取らんことと勧め。又祝儀を新造。

つかいさんおとと客に勧むる等。いろく乃物入りあり。うれと一々望

み通りにまれば。大變は金がいるものあり。此と拒めば。時とては。部屋

は娼妓各一つの閨房と持。床と入れむ。割床名代。一つ間。三四人乃

よて仕切りたる物と割床名代。床を舒る等。乃ことあり。あうれども。こ

といふ。いゝゆる。回し部屋あり。床を舒る等。乃ことあり。あうれども。こ

れは下等店乃常体。決まゝ恐るべうらむ。されども初めは。箇様をおと

と。いゝ。獨り寐の淋敷きめ。あゝんことを恐れて。金がな々れば。兎も

角も。金さへあれば。かゝみく。よつかふものあり。これ誠は初心のもの

へつゝこれらの人と好むものあり。又甚ど一きふいたつゝの客は相談
 もせず。無理ふ酒肴或は茶菓子等を押し附ける様あるおとあり。こ
 れ等も同じく謝絶あつ可あり。おの所爲をう。至つゝ厚つ皮のことな
 れども。向ふの爲る通り。任かゝるわけ。遂は會計は不足と生じ。明
 朝は馬とひさく。歸るやふかる仕末はあるべし。この馬とい勘定乃不足
 と。客の後より。宅までとりは行くものゝこと。よて。當時より。車は
 客と載せて。宅まで送り届け。勘定の済むまで。須臾も離れざるものな
 り。この馬乃賃銭。至つて高きものよて。誠は無益の極あり。右等の場合
 ありて。下等店は初めて遊ぶに賢は六ヶ敷ことあり。うれも正直なる樓

110X
668
154
149

に行^ゆバ。決^{けつ}まて左^さ様^{やう}あること^い。あきものあれば。かゝらず^{かうかつ}校^{かう}習^{かつ}ある樓^{ろう}へ
登^{のぼ}るべ^いか^いらず。その正^し直^{やう}と校^{かう}習^{かつ}との區^わ別^{かち}い。第^だ二^{いに}編^{へん}より乃^{かく}各^{ろう}樓^ち力^{から}競^{くら}を
書^かれつゝるとき。書^かきしめすべし

明治十七年四月廿四日御届

同 年 月 日出版

定價金七錢

東京日本橋區

濱町二丁目十四番地

山口縣士族

出版人
編輯無

吉 見 花 香



サマロシ

